

# 経営と健康

## 日本と台湾の架け橋「李登輝物語」

### 第一回

講談師 一龍斎貞花

ロシアのウクライナ侵攻を是とする中国。台湾へ侵攻する気があるから容認ではないかと勘繰ってしまいます。台湾海峡に中国の戦艦が出没しています。

2003年「も早や、中華民国は存在しない」と発言して台湾独立の意志を明らかにし、中国から敵といわれた故李登輝さん、健在ならどう対応されることでしょうか。元産経新聞論説委員で現在東京国際大学教授河崎眞澄先生の「李登輝秘録」を元に、講談に脚色し口演。連載も許可を得ています。

河崎先生は、李登輝さんから代筆を依頼されたほど信頼された方です。

大正12年（1923）父親が警察幹部という恵まれた家に生れた李登輝は、日本名岩里政男。日本は日清戦争の勝利により清国から台湾を譲り受け、台

湾人エリートを日本名に改名させ、李は日本教育を受け、中学時代までに岩波文庫700冊を読破し、古事記、源氏物語、夏目漱石全集をよむなど日本人以上、かくして難関の旧制中学に入学。東京の三高、仙台三高にならって外地で初めて設立された学校で、高い教育が行われ、40人クラスに台湾人は3・4人で、あとは日本人でしたが差別されることはありませんでした。

子供の頃、論語を読んでいた登輝は旧制台北高校、現在の台北大学に入学。新渡戸稲造の「武士道とは死ぬことと見つけたり」という武士道を読んで雷に打たれたような衝撃を受けたと申します。

新渡戸は、総督府で製糖産業に携わり、その後京都帝国大学の教授に。新渡戸の思想に心酔する登輝は、新

渡戸教授のいる京都大学農学部農林経済科に入学し、農業経済を学びそして強靱な精神力と忍耐力は、新渡戸の武士道であり、西田幾多郎の哲学でした。「私は、戦前の日本の教育で純粋培養された人間です」と。

日本人だつて哲学を学ぶ人は多くありません。哲学を学び武士道を読み日本精神を有したのでございました。

### 日本陸軍の歩兵に志願

京大在学中、太平洋戦争が激しさを増し、昭和18年12月

「日本陸軍の歩兵にしてください」と志願。3カ月前の9月、二歳上の警察官の兄が特別志願兵に合格。台湾出身者の多くが日本人として応募。

兄登欽は、日本名武則、

「無敵帝国海軍の一員として、名誉ある軍艦旗のもと、米英撃滅に働くことが出来感激」と語り、立派な日本人と認められたいという思いだったのです。

兄に続いて志願兵となった登輝は、訓練を経て下士官として高射砲部隊に配属され、米軍機が頻繁に来襲した台湾で実践経験を積み、千葉陸軍高射砲学校に配属され、千葉の上空を通過して東京方面に向かう米軍機に高射砲を撃つ。戦死した小隊長に代わり東京大空襲の翌日被災地で救援を指揮。

「日本人として受けた訓練や経験は、被災地の救援だけでなく、台湾を守る決意や行動の基本となった」

昭和20年2月、陸軍少尉として指揮に当たっていた武則はフィリピンで戦死。



お父さんは、戦死を受け入れられず、必ず帰ってくると位牌もお墓もありません。

この戦争で南進した日本軍の部隊が頼りにしたのが高砂義勇兵でした。

高温多湿のジャングルに不慣れな日本兵に対し、山間部で暮す先住民は夜も目が利き遠くの音を聞き分け、ジャングルでの戦いに切込み隊をかつて出て多くの死傷者が出ました。

戦後横井正一さん、小野田寛郎さんが帰還したよりもっと後に還った日本兵は、日本名中村輝夫さん スニョンさんというアミ族出身高砂義勇兵で、30年もの間モロタイ島のジャングルで任務を遂行し、毎日宮城遥拝を欠かさなかったといえます。昭和49年まで戦闘継続した二等兵です。台湾籍日本兵には、日本政府から何の補償もありませんでした。

こうした先住民に敬意を抱く登輝は、総統時代の94年先住民を憲法で原住民と定めました。

## 終戦で台湾に帰国

昭和20年8月、名古屋の部隊で終戦

を迎えた李は、翌21年1月横須賀浦賀から米山丸に乗船。

神奈川県大和市と座間市の高座海軍工廠で働いた10代の台湾少年8400人の内の2000人と共に台湾に帰国。高座で働いた少年兵は日本を恨むことなく、現在も高座同窓会がずっと続けられており、強制労働ではありませんでした。

日本統治が50年続いた台湾は、教育や経済、文化など日本の内地同様に文明が進んでいた。

毛沢東率いる中国共産党軍に敗れた国民党の軍人や家族関係者200万人が台湾へ逃げ込んできた。

台湾の行政権を握った蒋介石率いる国民党の兵隊はまるで敗残兵ながら、軍の規律もなく、ボロボロの服で天秤棒に鍋釜をひっかけて歩き、水道の蛇口から水が出るので金物屋の蛇口を奪い、バラックの壁に押し込み蛇口をひねったが水が出ず怒って金物屋の台湾人を暴行。電気を知らない兵士が奪った電球をバラックにつけたが光らないと怒り出すという嘘みたいな話。

国民党は武力で支配、規律の乱れ、略奪、暴行を続け47年2月、台北で禁

止の煙草を売っていた女性に取締官が暴行。これに抗議した台湾人に発砲し死者が出たことから、終戦後ずっと耐えてきた怒りに火がつき、2月28日台湾全土に拡大した反発を武力で弾圧された228事件。記念館が痛ましい事件を伝えています。

何世代も前から台湾生れの本省人と、国民党と共に中国から渡ってきた外省人との対立もありました。

38年間も戒厳令が続き日本語一切禁止、日本風の神社、建物、銅像が打ち壊されたが、東洋一のダムを造ってくれた八田興一の銅像だけは、「恩人の銅像は守らなければならない」と、台南の農民によって隠されました。

国民党の乱暴ぶりに、日本時代がよかったと懐かしむ人達がこっそり集って日本語で話し合う有様でした。

台湾に戻った李は、台湾大学を卒業後、ロックフェラー財団の奨学金を得てアメリカコネル大学在学中に書いた論文「台湾における農業と工業間の資本移動」が、アメリカ農業経済学会で最優秀論文に選ばれ、アメリカに於いて李登輝の名前が知られるようになりました。

その後45歳の時台湾大学教授として農村復興連合会委員会に復職。アメリカ留学帰りのエリートながら、作業服で自転車に乗って日が暮れるまで農家を訪れる現場主義。

その一方で国民党政権に反発する民主活動家と秘かに接触していたので、奥さんの曾文恵夫人は、「政治的な揚げ足を取られたり、密告されなければよいが」と心配。

69年6月初め、玄関の戸をドンドン

「戸を開けろ」

銃を構えた憲兵が

「二緒に来い」

「判った。支度をするから少し待つてくれ」

寝巻き姿の登輝は、着替えながら何枚もの小切手にサイン、

「連行されれば二度と帰れないかもしれない。投獄されたり処刑されても小切手を金に換えれば家族は暫く暮らしていける」と奥さんに小切手を。特務機関の警備司令部に連行され、毎日朝早くから夜遅くまで尋問される登輝が、解放後台湾の民主化への活動は、次回連続に申し上げます。